



第百四號 朝鮮其他海底

長嶺朝鮮其他海底

長嶺朝鮮其他海底

長嶺朝鮮其他海底

長嶺朝鮮其他海底

長嶺朝鮮其他海底

長嶺朝鮮其他海底

明治十五年七月七日

工部卿佐木高行

甲一三三

大正

一 鐵道局負歐洲、派遣ノ件	六
一 東北鐵道會社創立出願ニ付	七
鐵道局長、示命ノ件	
一 東北鐵道ノ儀ニ付前田利同	八
外五名内中ノ件	
一 東北鐵道會社創設再願ノ件	九
一 日本鐵道會社營業上ノ儀ニ	十
付鐵道局長、依頼方ノ件	
一 中山道鐵道幹線測量ノ件	十一
一 民設鐵道廢分ノ件	十二

大政大臣三條實美殿

此等は多考の事は、思ふ事候に
少くも

同趣に相當年限以上大北部電
信會社へ通信專權ヲ許可スヘキ
見上ヲ以テ外務省協議ノ上條約書
案取調更ニ可伺出事

明治十五年十二月十八日

長崎朝鮮間ニ他ハ海底線架
設ニ義付申

先般大北部會社ヨリ長崎朝鮮間海底
線新設及上海長崎間長崎浦潮斯德
員増線ニ義付申上ノ箇條依リ外務
省ハ協議案意見陳述致シ在處同
會社負ホル義一以テ來名存シ之
件借從付テハ納中ニ通以可
ク相成致否ニ義一決相成致否
依リ別紙外務省ハ協議ニ書面寫為
シ奉考ヨク申シテ存書申下抹會社
限リ申推シ答ル等ニ義一許容能相成

又浦潮線ノ如キ他ノ會社ホリ更ニ架線ニ
テ利ヲ争フ競争スル程ノ事アリ其ノ如ク
是迄ノ景況ヲ以テ具陳致シ多ク凡
多洋密ニ調カ處在呂宋東方擴張
會社ニ呂宋ヨリ長崎迄電線架設致カ
又此線ノ折子及ノ果シテ此架線ニ
請求シ許可ヲ得テ改修復シ電報
ニ多ク此線ヲ經由スルヲ以テ丁抹會社ノ通
信大ニ減スルニ至ルモ必我シテ付今般ノ計
畫ノ如ク巨額ノ金ヲ以テ増線スルモ遂ニ其
功ナキノコトナラス其損失不可償及ヘク若
又此他ノ各會社ホリ架線ヲ争フ利益
ヲ競争スルニ至ルモ能計ニ付同會社ニテ

他ノ會社ノ許可ナク特ニ丁抹會社ニ
テ許ヘラレシコトヲ請求スルモ亦其理由ナキニ
非ス故ニ長崎ヨリ他ノ外國地方ヘ架線
丁抹會社ノ外他ノ會社ホリ許可不致
事ノ決約抑成ツテモ可然例ト相考
ト長崎ノ外他ノ地方ヨリ外至ハ長線
ルモノハ敢テ同指ニ不可論也
國ヨリシ請求ニ依リ北海道根室ヨリ架
線シ義ハ陸議モ多ク其由是等シ如キ
從令丁抹會社ニ裁分カ影響及スヘシト
モ亦モ亦一多ク向テ強テ多ク請求ヲ拒絶
致場合もて今般丁抹會社
ノ舉ニ對シテハ我政府ニ於テも多ク利益

ラトムル派ニ付前通し通り長崎支ケル他
ノ會社ハ許リセスシテモ推ト保護リ
丁抹ハ與ヘ其獎手ヲ御案賛致セハハ追
ニテ工事ノミガ手ニ我企望スル所ニ於テモ
彼等七世ニテ承諾可致トモ右意
見併テ上申セザ可致ト採擇相成
度也

明治十五年五月六日

石井電信局長

佐々木工部卿殿

工部卿ヨリ外務卿照會可成事見込案

今般大少部電信会社丁抹人ガリ立ノケ条

一長崎ヨリ朝鮮國ニ海底電信線架設致

度事

一上海ヨリ長崎ニテ同所ノ魯領浦朝鮮

德ニ在來沈架之海底線路今一條増架

事

一右許可あり度尤丁抹存社ニ得置致事ハ

比國ニ於テモ多少カ有テ下可也政府設置ノ

節ヨリ向テ十年間ハ日本政府ト他ノ會社

許可ナクシテ特ニ丁抹会社ト專權ヲ與ヘテ

至當ノ保護相定度事

但既ニ情正及佛魯其他ホニ於テモ亦ノ如キ

專權ヲ與スル例 (是より中山)

右ノ如ク之類ノ經營ヲ容ルル者業ヲ自ラ專權
ト利益トヲ在望スルハ當ニ就ルキ事一者ト下
玉明治三年八月 即一千八百七十年 始テ海峽總統
架ノ總政府ノ許諾アリシ條約也即九條ニ
一般ノ保護ヲナスノ外少シモ關ス事ナシト以後若
同業ヲ起サント欲スルモノアリテ之ヲ允准スル
アル比存社ニ決テ苦情ヲ唱ルルモノアルハカラス尤若
日本政府他國ノ存社ニ此免許ヲ多ク利益
アリ免許ヲ出ス時ハ下持存社ニモ亦同種ノ利
益ヲ許スルコトナリ年一限ノ事ナリ其後出牙
十條ニ法底條成就ノ年ナリ三十五年一箇

施行ニ至ルトモ之ヲ就ルハ今般ノ事業複復沈痾
ニ及ハ素より拒テ理由ハ之ヲ其ノ共下持
存社ニ限リテ專權ヲ與ルル者我ニ多數教ノ之ニキ
或ハ他日障害トナル事トモ之ヲ或ハ難測
トシ許諾難ク如前ノ條ニ依テ之ヲ行フ條
約ニ準據シ許カサル我ニ敢テ之ヲ支テ之ヲ
就中領解國ノ如キ比講ノ國ト云ヒ殊ニ
改革上ニ於テ之ヲ電報架設等ノ如クハ其
海峽等ニ其不登ル如キ成カ況ヤ今日
ノ形勢ニ就ルハ亦亦電報架設等ノ如ク我
ニ於テ之ヲ容レテ之ヲ不登ル如キ電報架設等ノ如ク我
即方々ニ之ヲ極好機會トシテ之ヲ容レテ
許可ト云ヒ或ハ裁ク事ハ亦亦裁ク事ナリ沈

會社社長局ハ日本ニアル會社ノ海底線ヲ今
一條増設スル考案ニ關スル諸事件ニつき會社委
員トナリ帝國日本電信局^及關係アル帝國日本ノ
他官衙ト談判スルヲ「シリッキボール」氏ニ委任し且
右ボール氏ニ帝國日本電信局若クハ他官衙ト會
社ノ爲ニ宣約ヲ談判し取極メ而メ調印スル全權
ヲ會社社長局ヨリ與ヘシトシテ爰ニ證明ス
右ヲ證スル爲メ一千八百八十二年十月廿六日上海ニ於テ
予ハ爰ニ手記し社印ヲ捺ス

東洋地方

大北都 電信會社 總理

（ランド手記

社印

日本政府及丁株

白王市陛下使節ト議シテ丁株國テットストレ

イルラスクモナオクヤパン、エキステコシテレカラフ、

セルスカト 東北支那并日本傳
信機取設方會社名 會社傳信機ヲ日本

地方ニ陸揚スル免詔、約定

第一條

丁株國テットストレイルスリ、エキステ、ヤハシ、エキ

ステシコシテレカラフ、セルスカト 東北支那并日本傳
信機取設方會社名

會社、海中傳信機ヲ又日本國橫濱長崎

兩開港ニ於テ陸揚シ且海中ニ九州四國、南

方ヲ廻リ其海底線ヲ右兩港ト相接セシムル事

ニ付日本政府右會社ニ允准セリ

第二條

長崎横濱等右傳信線取設方ノ用意ヲナ
シ且其局ヲ連ルル為メ會社ニ要領ノ地ヲ借得
ルニ在リ兩港ノ日本官府ヨリ与テ又キ地ヲ指
示シ可成丈々海濱ニ切近シテ其局ヲ建テ且
其線線ヲ地上ニ通サリ為メ即索要ナル外之ヲ
最モ短クスルコト

第三條

傳信局其外建物ノ為借受ルル地及傳信
用ノ品物ノ條約面ニ従フテ之ヲ拂フベシ

第四條

會社ノ概線預ルト雖モ日本政府具責ヲ
受クベカラズ然レ日本政府ニテ若陸揚ノ線及

柱ヲ自國所持ノ線及柱同様ニ防護スベシ
且從來傳信機ヲ預ルルニ是布告セシ刑律
ハ日本領内ノ水陸ニ在リテ抹會社傳信機
ニアリテモ同様ニ行カレベシ

第五條

日本人若シ日本領内ノ水陸ニ在リテ抹會社
傳信機ヲ預ルルニモアリテ其証據明白ナル會
社具者ヨリ其償ヲ得ルカ為メ訴出ル理見
ベシ

第六條

會社ヲ使役スル者各其本國ノ戶籍ニ
列セシモノニシテ其本國ト日本トノ條約ヲ守リ
且日本ノ法ヲ遵奉スベシ

第七條

日本人民右傳信諸術ニ既ニ通用スル人
物ヲウテ世傳信機關社ニ入レト請トキ之ヲ免
シ且會社ノ官負ト均シキ取扱ヲ受テ一般ノ利
益ニ至レ込他人ト同様ナルベシ

第八條

日本政府ヲ傳ト放スル信ニ他ノ傳信ヨリ先
先ニ送ルベシ

第九條

日本政府ハ海陸會社ニ其業務ヲ管マシムル為ニ
之ヲ允准セシモノナシト只一般ノ保護ヲナスノ外少
シモ關係スル事件ニシテ向後モシ同業社ヲ起サ
シト欲スルモノアリテ之ヲ允准スルコトアリトモ會社

社ヲ決テ苦情ヲ認ムル事一アズカラス尤若シ日
本政府他國ノ會社ニ世免許ヨリ多ク利
益ヲアヘ免許ヲ出ス時ハ一採會社ニモ同
様ノ利益ニ與ラズ免許スベシ

第十條

世約定海成線成統ノ年ヨリ三十年間
施行シ三十一年ヲ過ル時ハ合議シテ何國條
ヲ改革スベシ

第十一條

世約定書白文ハ日本語ニ通佛朗西語ニ
通ス認ムベシ

明治三十年庚午八月廿五日

洋曆一千九百零五年九月廿日

於東京

外務卿

澤田三任清原宣嘉花印

外務大輔

寺嶋從四位藤原宗則

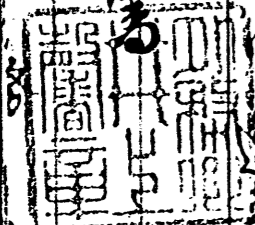
下味從節

シヨリシワキ 印

第二十九

大心部電信會社ヨリ長崎朝鮮間其他海
底電線沈没之儀出於工部省ヨリノ伺書
相違當省意見可申達旨出照會之趣政令
知照釜山其他海底電線ノ敷設セシムル為メニ
我政存ヨリお當ノ敷設ノ場ノ且適當ノ豫約ヲ
以テ該會社ニ請出シテ了シテ了ノ大伴ニ於テハ外
交上差支此儀ハ各々名去甚密敷及ヒ豫約ス
ベキ細目ニ至ツテハ尚意見モ及ビテ詳細ニ及ハ
當省ノ打合之上ニテ該會社ト請出シ後工部
省ノ出達お當ノ様政度此旨申渡申渡也

明治十五年十二月六日 外務卿井上馨



參議山縣有朋殿

追テ工部卿伺書ハ迄テ改メ也

工甲一三三號

明治十五年十二月十一日

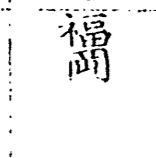
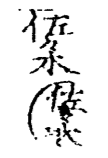
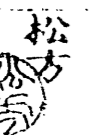
大臣

内閣書記官

工部省伺長崎朝鮮間其他、海底線
架設、儀及工部電信會社丁抹入
申立之事

右回議、供入

參議



[Blank lined area for text]

明治十五年十二月九日

第一句

掛巻函

書記官

別紙五都右同長崎朝鮮間其他、海底線架設
ノ後、今般大小部電信会社ヲ抹入リ、主修者
趣ハキ請リ、朝鮮國、海底線架設、在在沈架ノ海
リ、甚崎ヲ經テ、魯頓浦、潮斯德、在在沈架ノ海
底線、今一條ノ架設シ、甚運宜ノ節、向ニ十ヶ
年、日本政府、他ノ会社等、架設ノ許可ナシ

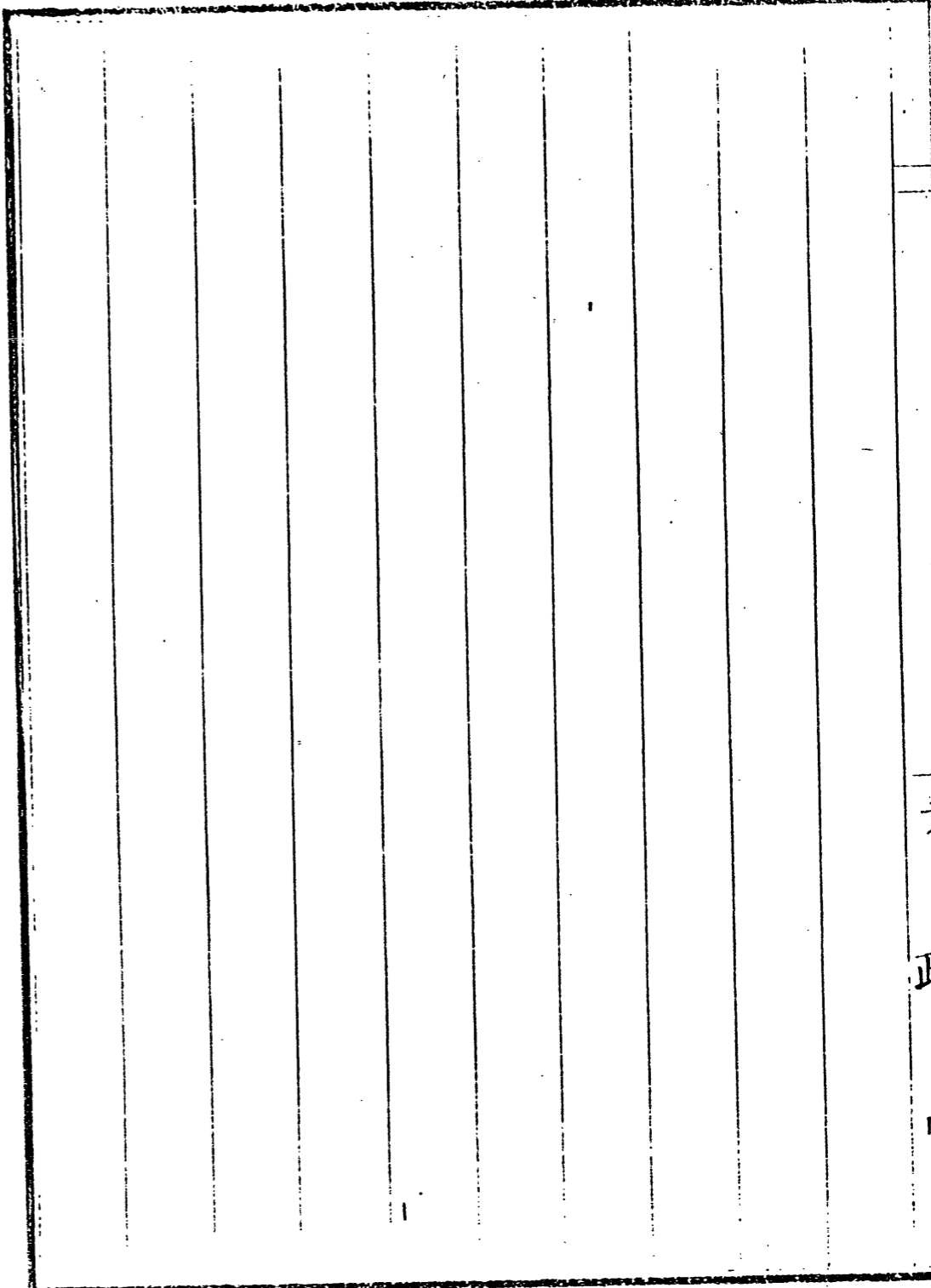
大正

皇持持株會社專權ヲ專權ニ出資官制多クは法律御少クは
按スル、右為給ノ假ハ我邦通信上ニ為モ大害候テ有レ
殊ニ其味アリ、新解國、新案々（キ線路ヲ至ラハ大企
業ニ至リテ且政府ニ於テモ多少利益ヲ得ル（キ
係有該社ノ清款ニ在ルニ由テ、保護ヲ与（ラレ可
能外ニ有ル哉可ノ上、其約條ノ細目等外務省ニ於テ
意見者有レ且其條々多ク（キ年期ノ多ハ由外ノ得失
亦調査ノ上河合ノ少証在ル成テ然ルニ依テ左ノ條々
案ヲ訂シ仰多裁可也

四條合案

何ノ類ニ相商ノ年限ハ所テ大北都電信會社、
通信者種多許可ク（キ見込テ外務省協成
ノ上條々案取消更ニ可也也事

明治五年十二月六日



秘

第一局

釜石鐵山行業處分之儀ニ付伺

岩手縣下陸中國閉伊郡釜石鐵山之儀元鑛
 山寮寮工長英國人ゴットフレード氏ニ達言ニ其土
 キ明治七年二月當時工部卿伊藤博文同
 大輔山尾庸三等此鐵山ヲ採採ニ普リ海
 内製鐵ノ用ニ供シ大ニ國益ヲ圖ラントノ
 議ヲ決シ遂ニ稟請允許ヲ得テ前ノ作業
 者ニ金貳萬圓ヲ給シテ鑛山ヲ官坑トス哥
 ニ聽テ置キ鑛鑪煉鐵鑪其他諸器械
 場ノ裝置又ハ運搬ノ為メ鐵道長延拾有
 五哩ヲ架設シ而シテ十三年ニ至リ粗其茲
 甲一三七